

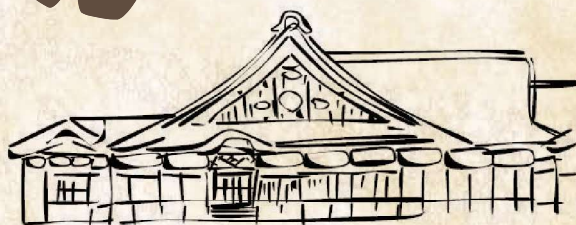
仙台市文化財パンフレット第83集

歴史を紐解く 埋蔵文化財！



仙台城大手門
金具

城が

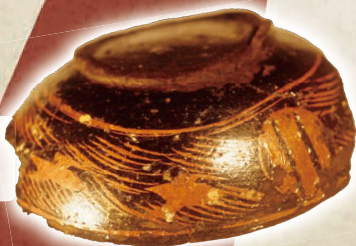


教えてくれること



若林城跡出土
織部の皿

北目城跡出土
漆絵椀



仙台城跡出土
美濃伊賀水差

日本最大級!! 仙台城大手門跡の発掘調査

調査者 仙台市教育委員会文化財課

場所 青葉区川内

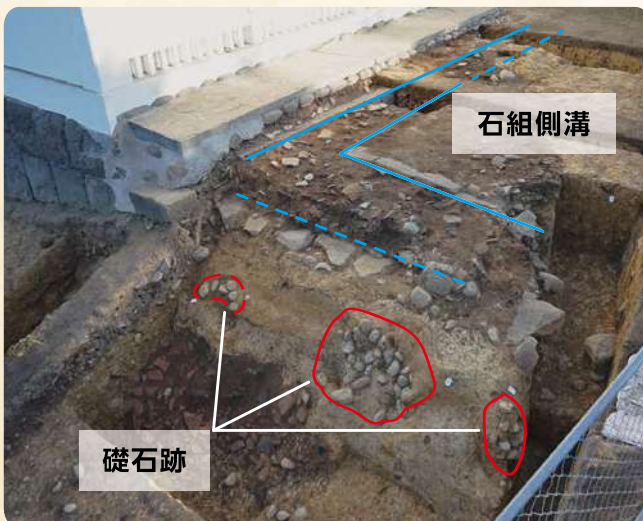
調査期間 令和5年9月1日～同12月18日
令和6年6月17日～同11月末



大手門跡周辺の航空写真



大手門の推定位置(北西から)



発見された礎石跡(北西から)

解説

大手門は藩主の出入りや特定の儀式のときにしか開かれない特別な門で、仙台城全体の正門でした。高さ12.5m、幅20mあり、その大きさは日本の近世城郭でも最大級です。

令和5年度は、大手門があったと推定される場所で発掘調査を行いました。その結果、大手門南辺の柱の基礎の痕跡(礎石跡)が3か所発見され、大手門がこの場所に建っていたことが証明されました。これらの痕跡は根固め石というもので、柱の基礎となる石(礎石)が建物の重さで沈まないようにするためのものです。

また、加工した石材を両側に並べた溝跡(石組側溝)も発見されました。側溝は大手門と脇櫓の屋根の形に合わせてクランク状に巡っており、屋根から落ちた雨水を受けるための溝(雨落ち溝)であったと考えられます。

令和5年度の発掘調査では数多くの瓦が見つかりました。その中には「赤く変色した瓦」があります。この瓦は、昭和20(1945)年7月の仙台空襲によって焼けたため変色したものと考えられ、空襲で大手門が焼失したことを証明する資料です。

また、令和6年度の発掘調査では脇櫓の屋根に鎮座していた鬼瓦が見つかりました。焼失前の大手門と脇櫓の屋根の構造を考える上で重要な資料です。

仙台城の“ハレの場” 仙台城本丸跡

築いた人 伊達政宗

年代 江戸時代（1601年～1868年）

場所 青葉区川内



本丸北壁石垣と
本丸大広間跡の遺構表示

解説

仙台城本丸は、初代藩主伊達政宗によって造られ、二代藩主忠宗が山裾に二の丸を造るまで、仙台藩の政治の中心でした。本丸は仙台城内で最も高い場所に位置し、大広間をはじめとする数多くの御殿建物が建てられました。二の丸に藩主の生活や政治の場が移った後も、重要な儀式や行事が行われるなど、江戸時代を通して使われました。

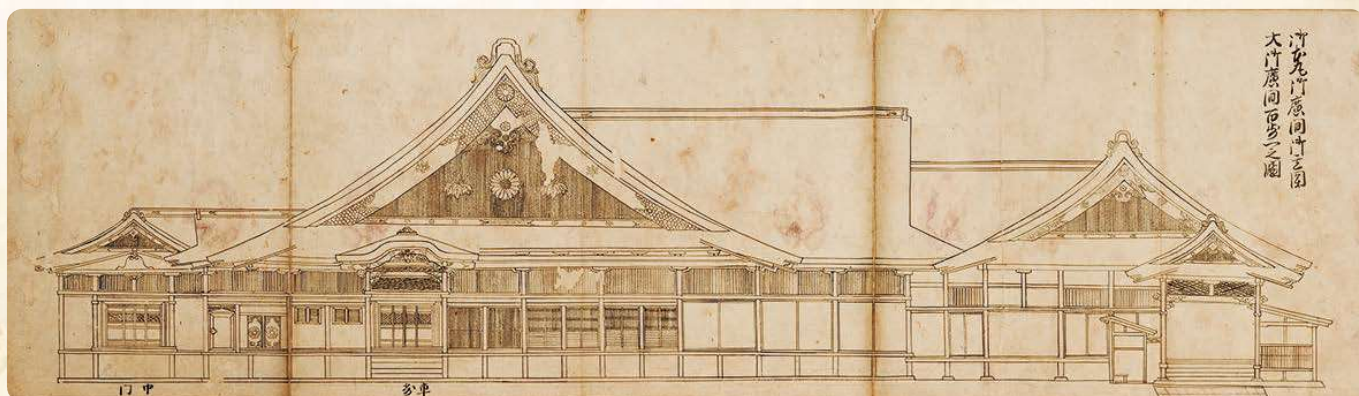
仙台城跡で最も多く見つかった遺物は瓦ですが、その中でも本丸跡から見つかった金箔瓦は東北地方の城郭でも数例しか見つかっていない、大変珍しいものです。そのため、仙台城の門や櫓などの中でも、特に主要な建物が豪華に飾られていたとみられます。

また、当時の高級品である中国産の青花(白地に青色の模様)の磁器が数多く見つかっています。国産品である肥前(佐賀県・長崎県の一部)産の磁器の皿と共に、本丸で行われた特別な宴会等で使われていたと考えられます。そのほか、16世紀末～17世紀初頭のヨーロッパを含む海外製とみられる大量のガラス器の破片が出土しており、全国でも貴重な出土例となっています。ガラス器は当時の日本において非常に珍しいものであり、宴席などで使用された際は、格別な存在感を有していたものとみられます。

このような出土遺物は、儀式や行事で使用されたものとみられ、本丸の“ハレの場”としての性格をよく表していると言えます。



『仙台城下絵図』(1664)(本丸部分)
(宮城県図書館蔵)



『千田家姿絵図』(大広間部分)
(仙台市博物館蔵)

230年続いた仙台藩の中心 仙台城二の丸跡

築いた人 伊達忠宗

年代 江戸時代（1639年～1868年）

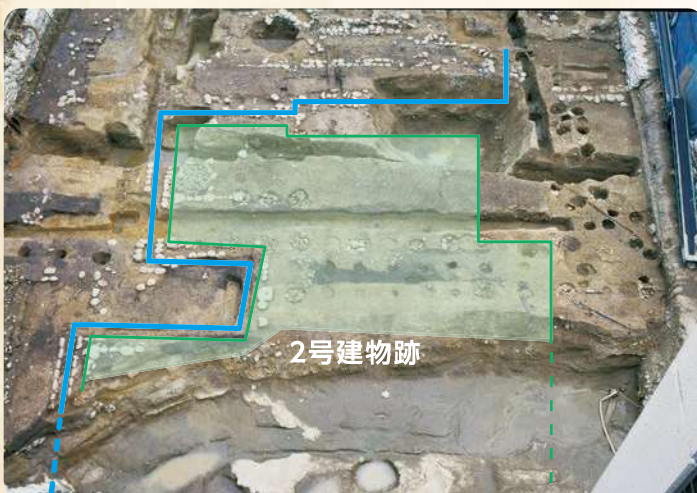
場所 青葉区川内（東北大学川内南キャンパス）



仙台城跡全景（北から）
（東北大学提供）



「享和二年之御家作御絵図写」部分（1802年）
（宮城県図書館蔵）



二の丸第17地点（中奥）の建物跡
（東北大学埋蔵文化財調査室提供）

解説

仙台城二の丸は、二代藩主伊達忠宗^{ただむね}によって寛永16（1639）年に藩主の新たな生活と政治の場所として造られました。本丸よりも約50m低い平地に造られておりますが、これは世の中が平和になり、戦に備える必要が無くなったため、より城下に近く、利便性の良い土地が藩主の居所としてふさわしかったためと考えられています。

二の丸は、主に政治の場所である「表御殿」と、藩主と家族が生活する「中奥^{なかおく}（江戸城でいう大奥）」に分かれていました。17世紀末の建て替えや19世紀初めの落雷による焼失後の再建など、時代に応じて姿を変えますが、幕末までの約230年間、仙台藩の中心として機能していました。

明治時代になると二の丸の御殿は日本陸軍の施設として利用されますが、明治15（1882）年の落雷により再び焼失してしまうと以後は軍の施設が建てられます。終戦後この場所は米軍キャンプとなり、現在は東北大学川内南キャンパスとなっています。

二の丸の建物跡や火災後の建て替えの様子などは東北大学埋蔵文化財調査室の発掘調査によって明らかになっています。また、政宗の長女^{いろは}五郎八姫が暮らしした西屋敷や四男宗泰が暮らしした屋敷など二の丸が造られる前にあった建物跡のほか、明治以降の軍施設に関わる遺構も発見されており、この場所の歴史を知る重要な成果となっています。

政宗のプライベート空間 仙台城東丸(三の丸)跡

築いた人 伊達政宗

年代 江戸時代(1601年~1868年)

場所 青葉区川内



仙台城跡全景(北から)
(東北大学提供)

解説

仙台城東丸(三の丸)跡は、初代藩主伊達政宗によって本丸とほぼ同時期(1601年頃)に造られました。2代藩主忠宗の時代以降は米などを備蓄する蔵が建てられており、絵図などには「蔵屋敷」や「御米蔵」と記されています。現在、この地は仙台市博物館があり、付近には東丸を囲む水堀(五色沼、長沼)や土塁が残っています。

昭和58(1983)年の発掘調査では、池を伴う庭園跡や屋敷跡、茶室跡などの政宗時代の御殿跡が発見され、この場所が築城後の早い段階から利用されていたことがわかりました。また、水指や茶碗などの茶陶(茶会に関わる陶磁器)が大量に見つかったほか、煙管、耳かき、羽子板、碁石などの生活用品や遊具も見つかりました。

儀式や政治の場として使われていた本丸とは対照的に、生活用品や遊具が見つかった東丸は、政宗が茶の湯や宴会などを楽しむ場として使われていたと考えられています。



茶室と考えられる礎石建物跡



茶室付近の土坑から出土した
美濃産の水指

政宗晩年の居城 若林城跡

築いた人 伊達政宗

場所 若林区古城二丁目

年代 江戸時代（1628年～1636年）



若林城跡 航空写真(南から)

解説

寛永5(1628)年に初代藩主伊達政宗によって築かれた平城です。周囲を土塁と堀に囲まれ、北西・北東・南西隅、南辺中央に張り出しが設けられた守りを意識した造りになっています。完成後、政宗はこの城で日々を過ごしながら、政務を執り行っており、参勤交代の際もここから江戸へ向かっていました。寛永13(1636)年に政宗が死去すると若林城は遺言に従い廃城となり、御殿建物の一部は仙台城二の丸に移築され、城内は藩の薬草園となりました。

現在は宮城刑務所となっており、土塁や政宗が朝鮮出兵の際に持ち帰ったとされる朝鮮ウメ(天然記念物)が現存しています。発掘調査では、城の西側にあった表御殿の建物跡や城内を流れていた六郷堀、大型のゴミ穴などが発見されています。

ゴミ穴からは、瓦や陶磁器、かわらけ(素焼きの皿)、すり鉢、焼塩壺のほか、城内での食生活が窺える動物や魚の骨も見つかりました。また、織部の皿は他に類をみない珍しい形と文様をもっています。17世紀前半に美濃国(現在の岐阜県あたり)の弥七田窯で焼かれたもので、全国的にも出土例が少なく希少な遺物です。



骨などが捨てられていた大型のゴミ穴



ゴミ穴から出土した織部の皿

中世仙台の中心地 岩切城跡

築いた人 ^{るす} 留守氏

年代 南北朝～戦国時代（14世紀前半～16世紀後半）

場所 宮城野区岩切字入山ほか

解説

岩切城は、宮城野区岩切と利府町にまたがる東西約1km、南北約1.1kmの大規模な山城です。この地域は、中世の陸奥国府の膝下であり、幹線道路と水上交通が交差する交易拠点で、中世の陸奥国の中心地でした。

城主は代々留守氏が担い、室町時代初めに起きた南北朝の動乱では合戦の舞台にもなりました。その後、元亀年間（1570～1573）に、伊達政宗の叔父の留守政景が利府城に居城を移し、廃城になったとされます。

昭和10（1935）年に行われた発掘調査で、中世城館では国内で初めて多数の柱の跡（柱穴）が見つかり、岩切城に関連する建物があつたことが明らかになりました。昭和57（1982）年に、国史跡に指定され、現在は高森山公園になっています。



くるわ ほりきり
西曲輪群の堀切
(岩切歴史探訪の会 松本忠雄氏提供)

留守氏の居館 洞ノ口遺跡

築いた人 ^{るす} 留守氏

年代 戦国時代（15世紀後半～16世紀後半）

場所 宮城野区岩切字洞ノ口

解説

洞ノ口遺跡はJR岩切駅の北側に広がる戦国時代の城跡です。岩切地区を含む広大な領地を支配していた留守氏が城主と考えられ、主に戦時に使われる岩切城とセットで、平時に使われる居住性の高い場所として機能していたと推定されます。洞ノ口遺跡は、鎌倉時代には屋敷が造られ、戦国期に入ると次第に堀が増築され、大規模な城郭となつたことが発掘調査でわかりました。中国産の白磁や青磁をはじめ、中世武士の祈りの様子がわかる塔婆（供養のための木札）、まじないやお経を墨書きした木の札も見つかり、中世武士の生活の様子が明らかになりました。



発掘調査で見つかった堀跡

政宗が拠点とした城 北目城跡

築いた人 あわの 粟野氏

年代 戦国～江戸時代（15世紀後半～17世紀）

場所 太白区東郡山

解説

北目城は16世紀後半までは粟野氏の居城で、関ヶ原の戦いから仙台城完成までの間は、伊達政宗が居城にしていました。政宗は関ヶ原の戦い（1600年）の際、北目城に入城し、対上杉氏の拠点としました。

現在、城の痕跡はほとんど残っていませんが、「たて館ノ内」、「うち出丸」、「でまる矢来前」など城跡に関わる字名あざが残っています。

北目城の堀跡は最大で上幅14m、深さ3mと大規模なものです。堀の底は高さ1.2mの「障壁」という壁しょうへきで区切られ、敵の動きを阻害します。このような構造の堀を「障子堀しょうじぼり」といいます。

この堀跡からは、伊達政宗が過ごした時期から明治時代頃までの様々な資料が見つかっています。



発掘された北目城の堀跡

まちのなかに眠る城 とみざわ たて 富沢館跡

築いた人 あわの 粟野氏

年代 戦国～江戸時代（15世紀後半～17世紀前半）

場所 太白区富沢西1丁目

解説

富沢館跡は地下鉄南北線富沢駅から西へ約700mに位置する遺跡です。主に戦国～江戸時代の城跡を中心に多数の遺構が発見されています。

城館周辺には最大で四重の深い堀が巡っていたことがわかっています。現在は宅地化が進み、当時の面影はほとんど残っていませんが、土塁どるいの一部は公園として保存されています。この地域には「館たて」という字名も最近までは存在しており、まさに城館がこの地にあったことを示しています。



富沢館跡 土塁全景(北西から)